

「英語コミュニケーション演習 IV」における「いじめ問題」単元の評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概要

「英語コミュニケーション演習 IV」は、「教育」に関するテーマについて英語でコミュニケーションをとりながら学ぶというスタイルをとる、いわば「教職のための英語」の授業である。語学学習とテーマ学習が統合された授業という意味では、「内容言語統合型学習（Content Language Integrated Learning, CLIL）」の実践とみなすことも可能である。今年度授業で扱ったテーマは、「小学校での英語」「不登校」「教師を巡る諸問題（e.g. 教員評価、良い教師の条件）」そして「いじめ問題」である。この報告では、「いじめ問題」単元（全4授業時間）について説明し、受講生アンケートの結果も参照しながら、実践についての省察を提示することとする。

「いじめ単元」は今年度初めて実施したものであり、以下の内容から構成されている。なお、教授言語は英語であり、受講生も以下の活動（読む、聞く、書く、話す）を全て英語で行った。

第1時間目 (1) 最初の段階での「いじめ問題」についての考えを書く。(2) 「いじめ問題」のキーワードをまとめた「単語チェックシート」を活用して、英語によるパラフレーズの練習を行う。(3) 「いじめ問題」の現状に関するアンケート質問（4問で選択式、次の(4)の活動に対応）に答える。(4) 内閣府による「いじめ問題」の現状（数、行為、対応策など）についてのデータをチェックする。提示されたグラフを英語で説明する活動を行う。(5) 次回までの課題として、「いじめ問題」のついて包括的に書かれた英字新聞記事を読み、質問に答えておく。

第2時間目 (1) 前回の授業で扱った内容に関する小テストに答える。(2) 「いじめ問題」用語を確認する。(3) 「いじめ問題」に関するNHK Worldドキュメンタリーの一部（英語ナレーション）を視聴し、重要な内容についての質問に答え、用いられていた英語表現もチェックする。(4) 課題であった英字新聞記事に関する質問に答える。(5) 様々な行為（カード）をいじめのタイプ別に分類し、その後それぞれのタイプについて英文を読み理解を深める。(6) 「ネットいじめ」の4つのケースについて、壁に貼ってある記述（英文）を読み取り、内容をグループの他のメンバーに伝

える。

第3時間目 (1) 前回の授業で扱った内容に関する小テストに答える。(2) 「いじめ問題」用語を確認する。(3) 「ネットいじめ」について、その特徴などについてまずペアの相手と話し合って答えを予想し、その後解答を課題英文の空欄を埋めることで確認する。(4) 「いじめ」の原因（主要なもの7つ）がまとめられた資料を読み、その中から3つの最も重要だと考える原因を選び、ペアで話し合う。ペアの相手を2度変え、合計3人と意見交換を行う。

第4時間目 (1) 前回の授業で扱った内容に関する小テストに答える。(2) 「いじめ問題」用語を確認する。(3) “What do you think about bullying in Japan?” というテーマについて書かれた英字新聞投書を読み、その内容を英語で他のメンバーに伝える（Read and Tell）。活動単位は3人グループで、3通の投書の内1つが各人に割り当てられる x 2 ラウンド、合計6通の内容を確認する。投書のタイトルのみを示すと、(i) Bullying starts at home, (ii) Accepting diversity vital, (iii) Help raise self-esteem, (iv) Establish shelter schools, (v) Bullies must be punished, (vi) School counselors needed である。(3) 「いじめ問題」への対策に関する様々な提言（全12提言）を読み、賛成か反対かを話し合う。その中には、「SNSの使用を禁止する」、「いじめの模擬体験の機会を持つ」、「『学級』を廃止する」といった過激な提案もあえて入れている。

次週の授業の最初 単元終了段階での「いじめ問題」についての考えを書く。

2. 授業評価方法

授業の成果を評価するために、学期末に授業アンケートを実施した。様々な点について質問を行なって回答を得ているが、本報告書では (i) 受講生によって効果的であると判断された指導上の工夫、(ii) 受講生が困難を感じた活動、(iii) 授業改善の方法の3つについてのみ、関連の自由記述データを基に考察することにする。（他にも、いじめ問題についての意見（英語）の変化、各活動の有用性についての数量的評価、英語力の変化などについても評価データを収集しているが、分析は行

っていない。)

なお、受講生及び回答者は 24 名（主な受講生は英語教育専修と国際理解教育コースの 2 回生）であった。

3. 授業評価結果と考察

3.1. 効果的であると判断された指導上の工夫

教育に関するテーマについて学ぶと言っても、第 1 言語（日本語）でそうするのは質的に異なるのであり、受講生が言語の壁を克服できるように様々な指導上の工夫を行う必要がある。自由記述において、「効果的な指導上の工夫」として特に言及が多かったのは、「いじめ関連用語（英語）のチェック」（12 名）、「英語ディスカッション」（10 名）、「いじめ問題の現状に関するグラフについて英語で説明する活動」（6 名）などである。（各活動についての数量的評価では少し異なる結果となる可能性もある。）

「いじめ問題用語チェック」とは、単元の最初に、いじめ問題の議論で用いられる可能性の高い用語（例えば、傍観者=bystanders, 悪口=name calling, 仲間外れ=ostracism）を特定し、その英語表現と英語による説明を一覧にしたシートを配布し、それをを用いて単語チェック、英語パラフレーズ練習を行ったことを示す。この用語シートの有用性について、ある受講生は、「普段いじめに関する単語は使わないので全く知りませんでした。そういった専門的な後は表現がいろいろあったり、辞書には載っていないでネットで調べたりしないと出てこない単語もあるから、単語シートが配られたのは良かったです」と述べている。また、「最初にいじめに関する英単語を覚えるのは効果的だった。専門用語を知ること、ディスカッションや自分の意見を述べる時に非常に役立った」というような、表現活動での有用性を表す回答もいくつか見られた。

「英語でのディスカッション」は、「いじめ問題」に限らず、どの単元でも中心的な活動として活用しているのであるが、そのメリットは英語の流暢さを高めることにとどまらない。ある受講生も、「自分の意見を発表することで自分の考えを改めて整理したり、他の人の発表によって新しい知見が生じたりした」と述べており、テーマ学習を進める上で英語ディスカッションが有用であったことを示す回答と考えられる。

ただし、英語（第 2 言語）ディスカッションにおいては、第 1 言語で議論を行う時以上に、議論点の焦点化を行い（「自由に何でも話し合う」ではうまくいかない）、またコミュニケーションへのエネルギーが生まれるように、効果的な opinion gap

を作り出す必要がある。例えば「いじめへの対応策」を考える際には、担当教員の方で具体的な対応策を 12 提示して、最も重要であると思うものを 3 つ選んで理由を説明させる、思わず反論したくなるような提案を提示して議論が行いやすくするなどの点を工夫した。

その他の回答として、「様々な提言について考えたり、その意見を読むことで多方面から「いじめ問題」を捉えることができた」、「他者に読んだ英文の内容を要約して伝える活動→自己の内容理解＋英語能力の向上」などの、授業者の意図に沿った回答も見られた。

3.2. 困難を感じた活動

「困難を感じた活動」については、予想していたほどは記述がなかったのであるが、数名の受講生が Read & Tell に言及していた。この活動は、“What do you think about bullying in Japan?” というテーマについて英字新聞に寄せられた投書（6 通）の内 1 つを読み、その概要を英語でグループの他のメンバーに伝えるという活動である。（それぞれの投書はグループの中で 1 人しか見ることができないように情報格差を生み出した。また、6 通の投書の内容を紹介し合うと、「いじめ問題」に対する代表的な見解を共有できるようになっており、「互恵的相互依存」の原理を応用した活動でもある。）

英文を読み、それを英語で他者に伝えるという活動は、「英語コミュニケーション演習」の I～III をすでに受講してきている学生でも必ずしも容易ではなく、実際に「準備時間が短く、英文をそのまま読み上げて伝える形になってしまった」、「自分の言葉で言おうとしても、結局元の記事を読み上げてしまったので、練習しておきたい」、「単語を易しく言い換えられない」などのように、「自分なりに英語で言い換えて相手に伝える」という部分に困難さを抱える学生も存在したようである。この活動が困難であろうことはあらかじめ予想できたため、(i) 難しいと考えられる単語については、易しい英語による説明を提示しておく、(ii) 各投書についてキーフレーズ（内容的に重要な部分）を 6～9 つ特定し提示しておく、(iii) 報告で用いると便利な英語表現を与えておく、という工夫を行ったのであるが、それだけでは十分ではなかったようである。将来的に、英語による言い換えの練習（原則の提示と練習）をより本格的に行う必要を感じている。

3.3. 改善の方法

「いじめ問題」単元終了時点で、授業者である

私自身が感じたのは「ケース・スタディを含めるべきであった」ということである。(3つの事例を準備中であったのであるが、時間的に扱えないことが予想されたため完成に至らず、結局実施しなかった。)できるだけ一般論で終わらないように、様々な資料や活動の中で具体的な情報を提示するように心がけたのであるが、効果的な事例分析を行うことができれば、受講生は「いじめ問題」についてのより具体的な認識を持つことができたはずである。受講生からも、「改善への提案」として次のような関連回答があった。

- ・ 「事例を出すより良くなると思いました。その事例についてどう思うかを話し合うと面白いと思います。」
- ・ 「Lineなどのネットいじめ問題では事例を基にロールプレイングでその構造を特定する。」
- ・ 「いじめ問題の解決策について、意見が中心で実例が少なかったため、ある学校でのいじめを解決するまでの過程をおさめた番組や新聞で、いじめは実際に解決できている例があるということが分かれば、(中略) どういった対処法が効果的かということも、より学ぶことができます。」

このようなコメントは、通常の英語の授業に対してはそもそも出てこない内容とも考えられるが、「教職のための英語」である本授業では大変重要な指摘である。

授業改善のための提言として、参考になりそうなものは他にもいくつか得られたので、それらについて検討してみたいと考えている。

4. 授業時間外学習の充実

授業時間外学習を促進する手立てとして、今回の授業までに読んでおく英文記事と Study Guide の課題を与えた。英文記事は、いじめ問題についての基本的理解が得られるように、関連情報が包括的に、また比較的簡潔にまとめられたものを探し出し、受講生に提示した。Study Guide では、(i) 英文記事でチェックしておくべき情報に関する質問と (ii) 次の授業でのディスカッション・ポイントを提示し、それらに対する答えを準備した上で授業に臨むように指示した。残念ながら、今回の授業評価の主対象ではなかったため、授業時間外学習については関連のデータは得られていない。

なお、授業改善への提案として、「Show & Tell でいじめに関する事柄について発表させる」という回答があった。授業時間外学習に基づくアクティブ・ラーニングを促すことにもなるので、来年度は実施を検討してみたい。効果的な発表にする

ためには、調べ学習に関する支援 (e.g. どうやって関連情報を見つけ出すか)、発表内容の構想に関する支援 (e.g. 発表の構成に関するひな形を示す、クイズ形式/インタビュー形式/スキット形式など様々な形態を例示する)、英語に関する支援 (e.g. 発表において使えるような英語表現を提示しておく)、発表の支援 (e.g. リハーサルにおけるチェックポイントを指示する) を考えておく必要があるであろう。